

# 大統領レトリック研究の方向性

はじめに

- 1、大統領レトリック研究
- 2、レトリック的大統領制研究
- 3、結語

はじめに

本稿の目的は、アメリカにおける大統領レトリック研究の方法論とその関心分野をまとめたうえで、そうした方法論の具体的適用に関し若干の示唆を行なうことである。方法論の理論的整理のみならず、それを実証研究においてどのように適用すればよいのか考えることは、著者自身の研究の進捗のみならず、これからの大統領レトリック研究にとっても有用であろう。

## 1、大統領レトリック研究

大統領レトリック研究の端緒は、リチャード・ニュースタット(Richard Neustadt)が1956年に発表した論文「世紀中葉における大統領(1)」である。ニュースタットは、1946年から1953年の間、最初、財務省で働き、その後ホワイトハウスのスタッフとして働いた経験を持ち、大統領がどのようにリーダーシップを発揮し、政権を運営していくのかを明らかにした大統領学者である。「世紀中葉における大統領」では、大統領の職務は二つにまとめることができるとしている。一つは、他の者には任せられない決断を下すことであり、もう一つは、無関心または全く動こうとしない者を説得し動くように仕向けることである。次いでニュースタットは、1960年に『大統領の権力—リーダーシップの政治学(2)』を発表した。この著書の中にある「大統領の力は説得する力である(3)」という言葉は非常に有名になった。クレイグ・スミスとキャシー・スミス(Craig Allen Smith & Kathy B. Smith)は、この言葉を、大統領のリーダーシップとは、説得力、つまり、レトリックを駆使して相手に自発的に行為するようにしむける能力に

あると解釈している(4)が、これは非常に的確な評である。つまり、大統領は憲法の規定上、絶大な権限を与えられているが、現状は、その権限を行使するためには説得によらなければならないという。ニュースタットは、その傍証として、トルーマン大統領(Harry S. Truman)がアイゼンハワー(Dwight D. Eisenhower)に語った言葉を紹介している。

「私は一日中ここに座って、本当はいちいち言わなくてもきちんとしておくべき仕事をするように人々に納得させようとしている。それこそが大統領の力量だ(5)」

- (1) Neustadt, Richard. 'The Presidency at Mid-Century' in *Law and Contemporary Problems* v.21 (4), pp.609-645 (Autumn 1956).
- (2) Neustadt, Richard. *Presidential Power: the politics of leadership* (John Wiley & Sons, Inc., 1960).
- (3) Neustadt, 1960 op. cit., p.10.
- (4) Smith, Craig Allen & Smith, Kathy B., 'Introduction' in Craig Allen Smith & Kathy B. Smith (eds.), *The President and the Public: Rhetoric and National Leadership*, pp. xi-xiv (University Press of America, 1985).
- (5) Neustadt, 1960 op. cit., p.10.

このようにニュースタットが、大統領研究に大統領の説得力という新たな視点を導入したのと時を同じくして、この当時のアメリカでは、「政治コミュニケーション」という言葉が使われ始めた。政治コミュニケーションは、「政治のことば、政治レトリック、政治宣伝、政治ディベート、選挙運動、政治世論、政治運動、政府とメディアとの関係、政治イメージ、政治のシンボリズム、態度変容、投票行動等(6)」を研究領域とする学問である。日本では、1992年に岡部朗一が著した『政治コミュニケーション—アメリカの説得構造を探る』が研究の基本書としての役割を担っている。制度的な大統領の演説のみならず、テレビディベートや社説漫画にいたるまで幅広い分野で研究が展開されている。

- (6) 岡部朗一『政治コミュニケーション—アメリカの説得構造を探る』,p.5 (有斐閣,

1992)。

ニュースタットの分析と政治コミュニケーション学の観点からすると、大統領レトリック研究とは概ね、大統領の行なう言語的行為とそれに付随する諸行為がどのようになされているのか、もしくはどのような意図と目的の下、そうした言語的行為の中で、ある特定の言葉やイデオロギーが選択されているのか解明しようとしている研究だと言えよう(7)。

(7) 島村力は、大統領レトリック研究の主題を、「『大統領がどのようにして国民の支持を獲得し、維持し、失うか』ということにある」と規定している。島村力「大統領のレトリック—政治言語学へのアプローチ」『海外事情』v.34(11), p.78(1986)。

大統領レトリック研究の方向性を定めるうえでニュースタットと同じく大きな役割を果たしたのが、1981年のジェームズ・シーザー(James W. Ceaser)、グレン・サーロウ(Glen E. Thurow)、ジェフリー・チュリス(Jeffrey Tulis)、ジョセフ・ベセット(Joseph M. Bessette)による共著論文「レトリック的大統領制の勃興(8)」と1986年のセオドア・ヴィント(Theodore Otto Windt, Jr.)による「大統領のレトリック—研究分野の定義(9)」である。なお、こうした論文については、岡部朗一と島村力も既に詳しく言及(10)している。屋上屋を重ねることを避けるため、本稿では簡略に紹介するだけに留めておく。

(8) Ceaser, James W., Thurow, Glen E., Tulis, Jeffrey & Bessette, Joseph M. 'The Rise of the Rhetorical Presidency' in *Presidential Studies Quarterly* v.11 (2), pp. 158-171(Spring 1981).

(9) Windt, Theodore Otto. 'Presidential Rhetoric: Definition of a Field of Study' in *Presidential Studies Quarterly* v.16 (1), pp.102-116 (Winter 1986).

(10) 岡部、前掲書: pp.16-17。島村力「大統領のレトリック—政治言語学へのアプローチ」『海外事情』v.34(11), p.77-92 (1986)。

「レトリック的大統領制の勃興」は、現在のように大統領が直接国民に訴えかけるス

タイトルがどのように派生してきたのかを歴史적으로とらえた論文である。レトリック大統領制の勃興の要因は、「大統領の指導力における近代主義」、「近代マスメディア」、「近代大統領制」の三つにあり、中でも「大統領の指導力における近代主義」が重要であるという。大統領が直接国民に訴えかけるスタイルは、「気まぐれな情念や違法な優遇(11)」に刺激されやすい国民に適したものではないと二十世紀以前は考えられていて、大統領が「国民の指導者」となるべきだという考え方は二十世紀以後のものである。そうした考え方の変化こそがレトリック的大統領制の勃興の重要な要因になったという。

- (11) Hamilton, Alexander, Madison, James & Jay, John. *The Federalist: A Commentary on the Constitution of the United States*, p.419 (Henry Holt & Company, 1898).

「大統領レトリック—研究分野の定義」は、大統領レトリック研究の視座や、その研究事例、研究の枠組みを説いた論文である。大統領の権力は、三つの要素から成り立っているという。その三つとは、憲法による規定、党首としての政治的影響力、世論である。これら三つのうち、世論に関しては長い間、大統領学者は注目してこなかったが、1970年代初頭になって初めて、大統領はいかにして大衆を納得させるのかということを中心とした研究が行なわれるようになった。そうした研究は、主に四つのカテゴリーに分類される。それぞれ、個々の演説に関する研究、レトリックの変動に関する研究、演説のジャンルの発展に関する研究、その他の研究の四つである。研究の枠組みについては、主に三つの方向性があるという。それら三つは、大統領レトリックの性質とそれが近代大統領制においてどのように位置付けられるのかということ明らかにする研究、大統領のエートスの本質を探る研究、任期中に大統領レトリックがどのように変化していくのか、そのパターンをとらえようとする研究の三つである。

大統領レトリックに関する最近の代表的な論文としては、ジョンソン大統領(Lyndon Johnson)のレトリック研究で知られるデイヴィッド・ザレフスキー(David Zarefsky)の「大統領レトリックとその定義の力(12)」がある。その中で、ザレフスキーは、大統領レトリック研究に関して三つの認識すべき点を挙げている。それらは、我々はどのように大統領レトリックの性質とその効果を理解するのか、大統領レトリックによって何がなされるのか、我々はそれをどのようにして知るのかという三つである。

(12) Zarefsky, David. 'Presidential Rhetoric and the Power of Definition' in *Presidential Studies Quarterly* 34(3), pp.607-619 (2004).

我々はどのように大統領レトリックの性質とその効果を理解するのかという点についてザレフスキーは次のように述べている。大統領レトリックに対する研究者の関心は三つにまとめられる。一つ目は、メッセージと聴衆の関係である。それは、大統領の演説により世論がどのように変化したのかを検証する。二つ目は、レトリック作成者とテキストの関係である。レトリック作成者がどのように考えてテキストを作成したのかを検証する。三つ目は、レトリック批評とテキストの関係である。テキストを読み解くことでテキストを思惑的に再構成し、そのテキストに駆使されているレトリックがどのような可能性を持つのか示唆する。

大統領レトリックによって何となされるのかについては以下の通りである。大統領レトリックは、社会的現実を構築するために、政治的条件にあわせて、状況を数ある可能性から定義し名付ける機能を果たしている。その具体的な手法としては次のような手法が使用されているという。別々の言葉を関連付けることにより、新たな意味領域を形成する手法がまず一つ目である。次に、分離によりある政策に対して好感が持てるようにする手法が二つ目である。例えば、ケネディ大統領(John F. Kennedy)が「軍備制限プログラム」を「真の平和」と呼んだのがこの手法にあてはまる。三つ目の手法として状況を簡潔で象徴的な言葉で表す手法がある。四つ目に物事の観点を変化させる手法がある。例えば、ブッシュ大統領(George W. Bush) は、イラク戦争の意義を、大量破壊兵器所持を止めさせることから、独裁者の打倒に移し変えていることが挙げられる。

最後に我々はそれをどのようにして知ることかという点があるが、これに関してザレフスキーは、現段階では明確な答えを出すことはできないとしている。

その他、大統領レトリックの研究アプローチとしては、大統領のパーソナリティからそのレトリック特徴を分析する手法や、諸大統領の一連の就任演説を分析し繰り返し強調されている伝統的政治理念を抽出したり、演説の中に含まれる人称の多寡により大統領のイメージがどのように形成されるか検証したりと、人文学、社会科学問わず、様々なアプローチがある。研究材料にしても、大統領選におけるネガティブ・キャンペーン、テレビコマーシャル、党大会でのスピーチ、大統領候補指名受諾演説、大統領就任演説、

一般教書、離任演説など様々な分野がある。

## 2、レトリック的大統領制研究

このように様々な分野があるわけだが、では大統領レトリック研究の中で「レトリック的大統領制(The Rhetorical Presidency)」はどのような位置付けがなされるのか。カーリン・キャンベルとキャスリーン・ジェイミソン(Karlyn Kohrs Campbell & Kathleen Hall Jamieson)が、『言葉においてなされる行動(13)』の中でレトリック大統領制研究について以下のように述べている。レトリック的大統領制研究が明らかにしようとしているのは、レトリックが大統領制において果たす機能である。レトリックが大統領制を維持するうえでどのような役割を果たしているのかが考察の対象であり、個々の大統領のパーソナリティは視野に含めていない。大統領制の下でレトリックが果たす機能を包括的に検証することを主眼に置いているので、大統領府内での閣僚や大統領の対話や会談などは考慮に含めない(14)。

(13) Campbell, Karlyn Kohrs & Jamieson, Kathleen Hall. *Deeds Done in Words:*

*Presidential Rhetoric and the Genres of Governance* (The University of Chicago Press, 1990).

(14) Campbell & Jamieson, op. cit., pp.1-13.

レトリック的大統領制を説いた著作の中で最も代表的なのは、岡部朗一も言及している(15)が、ジェフリー・チュリス(Jeffrey K. Tulis)の『レトリック的大統領制(16)』である。その中でチュリスは、何故、大統領は国民に訴えかけるのかという問題を究明している。まずチュリスは、大統領の役割の歴史的変化を論じる(17)。それによれば、二十世紀以前、大統領は立法に関与すべきではなく、民衆に対するレトリックを駆使せずに統治を行うべきで、政策形成に中心的な役割を果たさなくてもよいと考えられていたという。つまり、ニュースタットの言葉(18)を借りれば、大統領は「指導者」ではなく「官僚」たるべき存在だった。しかし、二十世紀に入り、社会が複雑化するにつれ、大統領が職務を円滑に行うために膨大な数の立法が必要不可欠になるという状況が生まれ、そうした背景の下で、セオドア・ルーズヴェルト大統領(Theodore Roosevelt)やウ

イルソン大統領(Woodrow Wilson)が、立法要請を、議会を飛び越えて、直接民衆にアピールするという形で初めて行った。こうした大統領の役割の変化が、レトリック的大統領制の萌芽であるとチュリスは指摘している。

(15) 岡部、前掲書, pp.16-17。

(16) Jeffrey K. Tulis. *The Rhetorical Presidency* (Princeton University Press, 1987).

(17) Ibid., pp.19-27.

(18) Neustadt, 1960 op. cit., pp.1-8.

中でも一般教書は、憲法第二条第三項で規定されていて、レトリック的大統領制において果たす役割は大きい。大統領にとってのその役割は、国民や議会に国家に関する認識を植え付け、現実を再構築することである。しかし、憲法では、どのように一般教書が伝達されるべきなのかは規定されていない。ジェファースン大統領(Thomas Jefferson)以来、一般教書は書面により議会に送致されていたが、ウィルソンの時代に一般教書は演説の形式をとるようになった。ウィルソンは一般教書を大統領のリーダーシップを発揮する絶好の機会ととらえ、それを演説という形式で効果的に活かそうとしたのであった(19)。

(19) Campbell & Jamieson, op. cit., p.52.

レトリック的大統領制研究は、大統領レトリック研究の核となる研究である。レトリックが大統領制を維持するにおいて、どのような役割を果たしているのかという一般原則を追求するのが第一の目的としている。もちろん、個々の大統領に限った研究も行なわれている。とはいえ、現時点で私自身は、トルーマン、アイゼンハワー両大統領を取り巻く当時の状況を踏まえたうえで、大統領はある特定のレトリックを何故、どのように選択したのかに関心があるので、レトリック的大統領制研究の目的から少し外れているようである。

### 3、結語

スペイン生まれのローマの修辞学者クインティリアヌス(Marcus Fabius Quintilianus)は、レトリックを「その目的に従い言説を適応させる技術もしくは才能である(20)」と定義

したが、私はその定義に基づき、一つのアプローチを定式化できるのではないかと考えている。大統領レトリック研究の一つのアプローチとして、レトリックと政治目的の相関性に注目することが大切ではないかと私は考える。つまり、最初に目的が設定され、それに従い演説や声明が組み立てられ、目的が達成されればそれに関して使用されたレトリックは成功したと見なすという方法論である。

(20) Campbell, George. *The Philosophy of Rhetoric*, p.1 (Southern Illinois University Press, 1963).

目的の設定をするのは大統領およびその助言者である。助言者には国務長官、ホワイトハウスのスタッフ、識者などが含まれる。どのような目的が設定されたのかは、大統領府内での閣僚や大統領の対話や会談、または手紙のやり取りなどから明らかにすることができる。演説や声明が組み立てられる過程は、演説や声明の草稿に関する大統領とスピーチライターとのやり取りや、国務長官その他の助言などから明らかにすることができる。目的が達成されたかどうかは、初めに設定された目的と、演説や声明が展開された後の政治情勢や国際情勢と比較することで判定することができる。もちろん、ザレフスキーも「レトリックだけでは聴衆の態度が変動した断定的な原因とはならない(21)」と指摘しているように、演説や声明のみによって政治情勢や国際情勢が変化するわけではないが、大統領にとって最大の努力を要するのは、演説や声明を、いかにレトリックを駆使し展開するかであるから、目的が達成されたか否かは、やはりそうした側面から判定されなければならないだろう。

(21) Zarefsky, op. cit, p.609.

また忘れてはならないことは、大統領個人の人間性がレトリックに及ぼす影響である。松尾式之は『大統領の英語(22)』で、ケネディからブッシュ大統領(George W. Bush)までフォード(Gerald Ford)大統領を除く八人の大統領を取り上げ、各大統領が駆使するレトリックを言語的側面ならびに大統領個人の人間性により分析している。松尾式之の一連の分析は、大統領レトリック研究を行なう際に大統領個人の人間性を考慮する有効性を示していると評価できる。

大統領レトリック研究は、私の知る限りではアメリカ大統領を対象にしているが、その一般性から他国の大統領にも適用できるのではないかと考えられる。今後の研究の可能性として、フランス大統領制とアメリカ大統領制においてレトリックが果たす役割の違いを比較し、その違いの原因を考察するといった研究が挙げられる。また、我が国の内閣総理大臣にしてもその言行は議会の速記録によって調べることが可能である。このように大統領レトリック研究は、現状ではまだまだ未開拓の分野が多くある研究領域であり、今後の研究が期待される。

(22) 松尾弑之『大統領の英語』（講談社, 2002）。